

# 由布院にみる地域づくり、まちづくり

ゲスト 由布院玉の湯 代表取締役会長 溝口薫平 氏  
聞き手 総合研究開発機構 理事長 伊藤元重

## まちづくりの始まり

**伊藤** 今日は、由布院全体を活性化する上で大きな役割を果たされています溝口さんに地域づくり、まちづくりについてお話をうかがいたいと思います。こういうことを始められたのは、大体いつ頃からでしょうか。

**溝口** 私達の運動は、地域づくりというよりも、何とか食べていく方法はないかという模索が始まりでした。当時の由布院駅前には、今と違って、観光客の姿が少なかったです。観光地というより鄙びた農村だった由布院にお越しくくださる観光客などいませんでした。温泉地としては、隣の湯平温泉の方が有名で、由布院は別府の陰に隠れているという状況で、「奥別府由布院温泉」と呼ばれていましたね。私達が東京などに参りまして、「君の故郷はどこだ？」と尋ねられた時には、「九州です」としか答えようがなかったですね（笑）。だから、「君の故郷はどこだ？」と尋ねられたら、「由布院です」と胸を張って言えるような由布院にはしたいという気持ちがいっぱい胸にありまし

た。

**伊藤** 映画祭とか音楽祭といった、今、非常に有名になったものの前に何かやられましたか。

**溝口** それらのイベントを催す前に、私達がやったことは自然保護運動でした。別府から由布院にお越しくくださる道路の途中に猪の瀬戸という湿原があります。そこにゴルフ場が建設されようとした時の反対運動が、私達のまちづくりの最初の仕掛けと言ってもいいでしょう。昭和 40 年代当時、各地の観光地は大きな施設をつくってお客様を呼ぼうという時代でした。だから、ゴルフ場は誘致こそすれ、その建設に反対したという観光地はどこにもありませんでした。しかし、別府から由布院にお越しくくださる時に、ゴルフ場の中を来ていただくよりも、やはり自然ゆたかな木々の中を歩いて来ていただきたいということで、私達は「由布院の自然を守る会」を立ち上げ運動を始めました。自然の「量」よりも「質」というものを大切にしたいと思ったのです。

ただ、農家の方達は、自然を守るよりも

経済的ゆたかさや生活道路などを優先して欲しい、つまり、みなさんはより便利なより合理的な生活を望んでいたのです。私達の自然を守れという運動は、自然の恵みを受けていた農家の方達が一番喜んでくれると思っていたのですが、そうではなかったのです。観光の関係者達だけが「自然、自然」と叫んでも、農家の方達の要望とかけ離れていくばかりでした。「自然を守れ」ということは同志的なものですから、仲間内で話している時には和気あいあい楽しいわけです。しかし、仲間から外れた方達から見ると、「なんだ、あれは一部のわがままな集団」ということになります。まちづくりをはじめ運動というものは、多くの方達の共感が得られなければ存続することができません。だから、「由布院の自然を守る会」から「明日の由布院を考える会」と名称を変えて、「由布院の自然を守れ」でなく「明日の由布院を考えていこう」という運動に変えました。

**伊藤** いろんな地域を巻き込む難しさを経験され、「明日の由布院を考える会」という形にされたわけですね。

**溝口** 「自然を守る会」となると自然擁護派だけの仲間内の場となります。しかし、「明日を考える会」となると、自然を守ろうという人達と生活の利便性を求める人達が参加できる会となるのです。そして、賛成派、反対派がお互いに議論していくと、「あの人はこういう思想、こういうものの考え方を持っているのだ」ということが明確に見えてくるのです。すると、不思議にお互いが協力し合えます。時間はかかりましたけれども、故郷をより素晴らしい町に

しようという共鳴の輪は広がっていききましたね。

**伊藤** 観光関係者、旅館の方以外に農家の方とか、いろんな方に声をかけたわけですね。

**溝口** 当時、私達は会の仲間達を「十七人の侍」と呼んでいました。農家の方達が8人、旅館、商業、サラリーマンなどの方達が8人、それに行司役としてお医者さんに会長をお願いしました。計17人ということです。農家の方達も、観光の方達も、お医者さんのところへ行きますよね。お医者さんには誰もさからえません。だから、お医者さんのさじ加減次第で16人をまとめて欲しいということです。

その中に、環境を考えようということで環境部会、農業を中心とした産業を考えようということで産業部会、コミュニティというか人間関係が大切だということで人間部会、三つの部会をつくりました。部会制にして、環境部会だったら観光は大事ですから旅館関係のリーダーが環境部会長、生産部会には篤農家が多かったから、その篤農家を一番把握できるとすれば消防団長だろうということで消防団長に生産部会長をお願いしました。人間部会は、人間の最後はお寺だということでお寺のご住職に人間部会長になっていただきました。その三つをまとめる事務局長として、外に向かって人脈が広いということから、私が事務局長に座りました。

**伊藤** まったく民間の方で始められたというのは、当時としては珍しいでしょうね。

**溝口** そうですね、他の例はあまり聞いたことはなかったですね。当時の地域づくりはほとんどが行政主導でしたね。それを民間主導でやったわけです。「行政は何をしてくれましたか」とよく尋ねられますが、「邪魔をしなかった」と、私は答えています。自由にさせてくれました。しかし、外から見ると、行政を大胆に批判するなど、勝手なことをやったわけですから、当時の町長は相当に肝が据わっていたということです。そうですね、行政と私達は「対立的信頼関係」にあったと言ったらいいのでしょうか、由布院をいい町にしようという想いがお互いにありました。自分達の子どもや孫の時代には、「いい町だ」と言えるようにしたいと考えていました。だから、「いい町だ」と言える町にするために、お互いに議論し、お互いに協力し合ってきましたが、最終的には次の世代へどういう町を残すか、伝えるかという想いがすごく大きかったですね。

**伊藤** コトラーという、ノースウェスタン大学の世界的に有名なマーケティングの先生が、マーケティングは、自分の持っているものを一生懸命売るためのテクニックではない。皆が自分の価値に共鳴してくれるように、何をつくるのかとか、何を自分とするのか、ということだと言っています。観光でいうと、外からやって来る方と地元との間の接点の価値観を強めていくことで、まさに由布院自身が何を目指すかが大事だということですね。

**溝口** そうですね。最終的にはマーケティングをやってきたということにもなります。お客様は何を求めているかという市場性です。そのためにはやはり地域のブランド力

というか地域のイメージをつくらなければなりません。そのイメージとしては、環境を自然を大切にすることが手段となり、そこに地域の人達が想いを重ねていく。そして夢に向かって進んでいく。その夢というのは、「次の世代にいいものを」ということです。そのためには、内の人達だけというのではなく、外の人達と交わって初めて地域が良くなっていくわけです。だから、お互いが協力し合おうということです。そのために、まず内の人達の情報を共有していくことが大切だと、由布院旅館組合の会費も売上げの1万分の6として、会員各自の旅館の現在の実情を教え合っています。板前さん達も、自分のレシピをすべて公開して見せ合い、新しい料理を開発しています。

## 海外研修で得たもの

**伊藤** 最初の「明日の由布院を考える会」は、その後はどのように変わりましたか。

**溝口** 夢想園の志手康二さん、亀の井別荘の中谷健太郎さん、そして私の三人で、昭和46年に50日間ほどの日程でヨーロッパに行きました。ヨーロッパに行く前に、私達は日本全国いろいろな地域を見て回りましたが、どこも目指すものは当時団体さんが溢れ経済的に潤っていた別府や熱海でしたね。しかし、同じものを真似ても仕方がないと、新しい可能性を求めて、私達はヨーロッパの各地を旅しました。そこで、初めて、私達の目指すあるべき姿というものが見えてくるとともに、「日本近代公園の父」と呼ばれた本多静六博士が大正13年に由布院に来て講演された「自然ゆたかな公園の中に町があると言われるような由布

院になれ」という提言が理解できました。

昭和40年代というと1ドルが360円の頃ですから、貧乏旅館の主としては費用の捻出に苦慮しました。「まちづくりの研修のためヨーロッパに行きますから100万円貸してください」と銀行にお願いすると、「何を考えているのだ」「借金ばかりの旅館がヨーロッパまで研修とは何だ」と言われましたね。

**伊藤** 例えばヨーロッパへ行って一番印象に残っているのはどこですか。

**溝口** ドイツのバーデン・ヴァイラーという小さな温泉保養の町です。ホテル「ポスト」のオーナーには多くのことを教えていただきました。家族の皆さんとテニスを楽しながらというくつろいだ雰囲気の中で、オーナーは私達の緊張した気持ちを和らげるように迎えてくれました。そのおもてなしに感激しました。ネクタイ締めて「いらっしゃい」と言うことではなく、「いやあ、日本からよく来たな」という感じですね。もうひとつ感激したことは、ドイツ語ではわかりにくいだろうと、英語に堪能なオーナーのお嬢さんを外国からわざわざ呼び戻して待っていてくれました。お客さんをお迎えする時に、相手の事情を考えてもてなすとともに相手の利便を図るということがいかに大切かということをお教えられましたね。

そして、オーナーは熱い想いを語ってくれました。

「町にとって大事なのは静けさと緑と空間で、私達はこの三つを大切に守ってきた。このバーデン・ヴァイラーのまちづくりには100年の年月がかかった。町のあるべき姿をみんなで考え、そういう町をつくりた

いという想いを大切に、みんなで頑張ってきた。君達も君達のまちづくりの端緒についたばかりだが、君達は町にとって何ができるか。君は、君は、君は」

オーナーに一人ひとり質問されましたが、私達は赤面するだけで何も答えられませんでした。しかし、そこでまちづくりの基本というものを学びました。

まちづくりには、企画力のある人、調整能力のある人、それを伝えることのできる伝道者の三人が必要だということをおっしゃいました。「君達は何を担えるか」ということで、私達は三人の役割を話し合いました。企画はアイディアの豊富な中谷健太郎さんです。彼は映画祭などいろいろな企画をしていくようになります。しかし、企画の人が結果を考えていたら何もできなくなります。これはこうすれば実現可能だ、これは行政に対してどのように対処しなくてはいけないなどの調整役を私がやりました。志手康二さんは、すごく人望があるというか、若者達の兄貴分のような存在で、若者達の気持ちをしっかりと受けとめていました。志手さんが言うのだったら一緒についていこうとなります。そこで、志手さんは伝道者として頑張ってもらおうと、三人三様の役割を決めました。

**伊藤** ドイツで聞いた企画力とか調整力というのは、影響が結構あったわけですね。

**溝口** そうすることにより、まちづくりが動くようになりました。いろいろなことをやる場合に、仲間達に伝える伝道者というのは人格者でないと勤まりません。そう信頼です。でも、企画というのはあんまり信頼されていたら新しい考えは起こりません。

夢みたいなことを言って「あいつは何を考えているのだろう」ということになります。だから、中谷健太郎さんは「ホラケン」とか「アゴタカ」とか呼ばれていました。中谷さんの企画が面白いと予算をつけると、また次のことを言い出すので、行政の方達は中谷さんの話にはためらいがありました（笑）。私は、行政の中で働いていたこともありましたので、行政の立場も少しは分かりました。そこで、私がついていると行政の方達が安心してくれました。

**伊藤** 帰ってこられて最初にやられたことは何ですか。

**溝口** まずは、町の景観問題でした。町を美しくしていくために、道路に乱立していたホテルや旅館などの看板を全部取り払い、統一したデザインで案内標識をつくりました。それから、あらゆる機会を通して、町内の方達に「美しい町」というものの姿をアピールしました。私はヨーロッパでは写真を沢山撮りましたから、「このような美しい町がある」と写真を見せて説明しましたが、写真はどのようにでも細工ができるとなかなか信じてもらえませんでした。

7年後、町のみなさんと一緒にヨーロッパに再び行った時は、カメラを持たずに行きました。すると、町の暮らしが見えてきました。やはり、映像を通すと欲があるから、レンズを通して作品をつくらうとするわけです。そうすると質感が伝わりません。カメラで写した写真を通してではなく、人と人が直に触れ合うことを通して、みんなで町をつくっていかねばならないと思いましたね。だから、景観を考える部会というものを設けて、行政がやらなかった

小規模な公聴会のような会を絶えず催してきました。

## 手ごたえはいつごろから

**伊藤** まちづくりをやり始めて、これは行けるかなと思われ始めたのはいつ頃でしょうか。

**溝口** オイルショックで価値観が変わった昭和49年頃でしょうかね。価値観が変わったことにより、みなさんに由布院のまちづくりというものが初めて評価され始めました。

**伊藤** それは例えば旅館にいらした方との会話とかからわかるようなものですか。

**溝口** そうですね。それと、旅行業者が送り込んでくる客層が団体から個人となってきました。マーケティングの中にも、それは顕著に現れてきましたね。

**伊藤** これで自分達のやっていることは正しい方向に向いていると思われたわけですか。

**溝口** 正しい方向に向いているというか、価値観が「量」から「質」へと変わってきていると思った時に、時代の流れが自分達のところに来ていると感じました。それともうひとつは、旅行業者などのペースに乗らなかったことですね。別府が「団体、男性、歓楽街」と叫んでいる時に、由布院は「小グループ、女性、保養地」と狙いを定めて頑張ってきました。その狙いが頑張り鮮明に出始めてきました。

**伊藤** それは皆さんの方では、小グループ、女性、保養地ということは意識されたのでしょうか。

**溝口** それしかなかったですね。意識しないと差別化ができません。初めから、「小さな別府になるな」「別府の真似をしない」ということでやってきました。だから、私達は「由布院の今あるのは別府のおかげ」と言っています。まさに別府は反面教師でした。まちづくりに模索していた当時、私達が東京に行った時などは、「由布院は別府の近くにありますが」ということで宣伝していました。しかし、価値観が次第に変わって、別府の方達が「別府は由布院の近くにありますが」というように言ってくださいます。そのように、女性の市場が大きくなっていったということです。それは旅のスタイルから見てもそうでしょうが、旅の主導権が女性に握られるようになってきたということでしょうね。

また、女性の方達のクチコミの広報力はあなどれません。男性の方は家に帰られても旅についてはほとんど話されません。女性の方は違います。旅館が温泉が食事がどうだったのこうだったのと全部おしゃべりして宣伝してくれます。

そこで女性が求めるものは何かと考えますと、安全で、清潔で、食べ物がおいしいことなどが思いつきます。私達はそれをいかに実現していくかに努めました。部屋にしても、風呂、洗面所、トイレ、そういう水回りを大事にして、女性にとって快適なように、清潔に広くゆったりとしつらえました。日本旅館は、玄関、床の間などにお金をかけがちですが、水回りに一番目配りが遅れています。

**伊藤** それはやっぱりお客様に教えてもらうようなところがあったのでしょうか。

**溝口** それもちろんありますが、由布院の女性の方達は多くの旅館やホテルに泊まるなど、外国旅行をよくしています。女性達というか家内や娘達が一番敏感に感じたものを、私達は大切にするようにしました。男性的な経営者の視点ではなく、女性的というか母性的な視点で求めているものを大切にしようということです。

**伊藤** 日本もかなりあちこち地域を回られましたか。

**溝口** 国内外を問わずにあちこちと回りました。今でも積極的に旅するようにしています。そうしないと、見えてこないものが沢山あります。そして、みんなで考えるのです。先程も言いましたように、由布院はオープンを心がけ、旅館の主はじめ料理人など従業員同士がお互いの情報を交換し合っています。

**伊藤** お話の中にあっただような、シェフとか料理人の方達が自分のレシピをオープンにするというのは、板前の世界では考えられないことですね。

**溝口** 料理人が板前として生きている間は、自分達の世界を大切にします。しかし、旅館の主が自然とか地球環境を考えるようになると、料理人も変わってきます。今までの料理人ではなかなかそこまで行きませんでした。でも、主が料理人を雇用する場合、主が使いこなせるよう料理人の仕組みを作ってきたということです。その仕組みの中

では、料理人同士がお互いをオープンにしないとやっていけなくなりました。昔風な料理のプロ中のプロという人達の居場がなくなっています。自然を知っている、農家を知っている、そういうことを体験した料理人達の方が地域では活用しやすいわけです。由布院では、そういう仕組みを町全体としてつくって来ました。

**伊藤** 食べ物がおいしいことが大事だとおっしゃったのですが、それは具体的にどのような方法で実現されましたか。

**溝口** 一流のレストランや料亭を食べ歩いて自分の舌を磨くということも大切ですが、料理に造詣の深い料理人を由布院に招聘して料理を指導してもらったり話を聞いたり料理人達の勉強会などもやりました。そうしていく中、「ゆふいん料理研究会」ができて、みんなでお互いにレシピを公開しあい、よりおいしいより安全な料理を研究する勉強会を定期的にやるようになりました。

**伊藤** 「ゆふいん料理研究会」というのは、面白いですね。その頃からできてきたわけですか。

**溝口** 健康保養観光地を目指した由布院のまちづくりの中のひとつの仕組みとしてできてきたものです。由布院ブランドという市場が確立されてくると、料理も重要なポイントになってきます。滞在型の旅行形態を可能にするためには料理が一定のレベルでないとはいけません。そのためにはレシピをお互いに公開して、それにプラス自分の創意工夫なりオリジナルをどうつくって

くかと頑張っています。また、積み立てをして外国に行ったり、由布院に料理の関係者が来られると積極的に話を聞いたり、勉強は機会ある度に絶えずやっています。

## 音楽祭・映画祭のきっかけ

**伊藤** 当時から、言葉は別として、地産地消的な発想というのはあったのでしょうか。

**溝口** 由布院のまちづくりには、昔から、「地産地消」という発想はございましたね。由布院でできるもので名物をつくろうというので、猪が出るからと猪料理、猪という単品だけでは宮崎県には先進地の町や村があるから、これだけでは駄目だ。他はないかな、鹿が出るから鹿の料理を加えるかと、でも鹿だけでもどうにもならない。それでは馬と鹿を組み合わせて「馬鹿刺」というのはどうかというようになります(笑)。「それはイメージが悪い」「馬は熊本だ」「それでは鶏だ。花札にイノ・シカ・チョウってあるから、猪と鹿と鳥がいい」ということで地鶏ということになりました。遊びみたいなものですが、話題性を絶えず求めました。猪、鹿、地鶏と単品では勝負できないけれど、地域のを組み合わせることにより、ひとつのユニークな料理となっていくのです。そして、その行程をみんなで楽しむことにより、いろいろな人達を巻き込むことができるのです。

**伊藤** 巻き込むという意味では、たまたま今日、「湯布院映画祭」が開かれていて、これは大変有名ですけども、これもそういうことの一環ですか。

**溝口** 昭和 50 年に大分県中部地震がありました。由布院の町はずれにある九重レイクサイドホテルが倒壊するなどの被害を受けました。そのホテルで、九州交響楽団のみなさんは合宿を予定していましたが、できなくなり苦慮していました。由布院は狭い地域ですから、どこの旅館に誰が泊まっているというのを大体知っています。それは困っているだろうということで、みんなに生の演奏を聴かせて欲しいということを経験的に、災害を受けなかった由布院盆地の方で合宿の場所を提供しようということになりました。団員のみなさん達は喜んでくれたのですが、由布院には肝心の演奏する場所がありませんでした。そこで、由布院は別荘が多いから、別荘の庭を借りようということになりました。企業メセナということで一、二日ほど別荘を貸して欲しいと企業にお願いしました。企業も、由布院でそういうことをやるならいいよと快諾を得ました。

そのようにして、九州交響楽団のみなさんが夏合宿する時には、正装した楽団の人達が子ども達に演奏を聴かせてくれるようになりました。クラシックを生で聴くことにより、「由布院は音楽の聴ける素敵な町です」と、子ども達が故郷を誇りに思うようになりました。その頃に音楽を聴いた子ども達の中に、今では、「ゆふいん音楽祭」の実行委員になっているものもいます。地震という危機を音楽祭という素晴らしいイベント誕生のきっかけにしたのです。

また、音楽祭が始まった頃、映画好きの若者達が、「映画館のない町で映画を見よう」ということで「湯布院映画祭」が始まりました。これは中谷健太郎さんの企画でした。大分に「大分良い映画を見る会」と

いう学生のグループがありました。中谷さんは映画の助監督もやっていたぐらいの映画人ですから、若者達と映画ということで想いはつながりました。映画を上映するとなると、興行権など問題などが生じます。でも、由布院には映画館がないから、逆に興行権の問題などは生じませんでした。そして、大分の映画の好きな大学生はじめ若者達が、由布院という舞台で「湯布院映画祭」を開催してくれたのです。そして、全国から映画好きな連中が由布院に来るようになり、他の映画祭とは違った由布院独特な「湯布院映画祭」が 31 年も続いているということです。

**伊藤** 映画を見せたり、いろんなシンポジウムをやったりするわけですね。

**溝口** 昭和 50 年代の頃、映画は次第に衰退していくという状況でしたから、映画関係者には映画の素晴らしさを多くの人達に知って欲しいとの想いがありました。当時の『キネマ旬報』の編集長は白井佳夫さんでした。白井佳夫さんと私の家内は早稲田で先輩後輩という関係でした。そこで白井さんに、「中谷さんはじめ大分の若者達がこういう映画祭をやろうとしている。なにか応援をしてくれませんか」とお願いをしました。すると、白井さんが中心になって、多くの監督さん、スタッフ、俳優さん達がノーギャラで由布院の映画祭に参加してくれるようになりました。

**伊藤** 面白いですね。映画祭などを始めるということのきっかけに、今まであった細かい関係みたいなものが強くなっていった。

**溝口** 人脈ということです。由布院観光というのは「人脈観光」だと思います。人と人を結びつけていく。舞台では、誰と誰かを結びつけるためには、そこにひとつの基本的なベースがないとうまくいきません。何やら訳のわからないようなところには行かれませんか。そこで、まず映画好きの人達が来て、次に監督さんや俳優さん達が来て、その方達を接待するのに何かないかなと思案している時に、麦焼酎が出てくるのです。その頃、麦焼酎はまだブームにならない頃で、大分以外ではなかなか売れないという状況でした。そこで県外の人達に大いに宣伝してくれと、「いいちこ」や「吉四六」などの麦焼酎の関係者がスポンサーになって麦焼酎をふんだんに提供してくれました。監督、俳優、映画好きな観客、地元の人など、多くの人達が一緒に映画を観て、議論して、麦焼酎を呑み騒ぐという楽しい映画祭になりました。

それまで映画人達は、東京で試写会を催しても、それが観客にどのように受けるかというのが見えていなかったわけです。由布院に来れば観客の反応を知ることができるとともに議論もできます。マーケティング先の観客の傾向をすべて知ることができるのです。それに温泉に入っておいしいものを食べて麦焼酎をふんだんに呑めるのです。そして、夏の間、ノーギャラで由布院に行ってきたということが、東京の映画人の間では、ある種のステータスとなってきました。そこで、参加された映画人の方達は「皆さんに受ける映画をつくって、また由布院に来ます」ということになるのです。

また、イベントというと、由布院のまちづくりがある面で成功したのは、イベントの情報を開放したのと、新聞や雑誌などの

マスコミ扱いが上手だったということもあります。「牛喰い絶叫大会」というのがありますが、あのようなただ叫ぶだけのイベントがなぜ30数年も続いて報道されるかというと、あの叫ぶということがポイントなのです。何を叫ぶかということが時代の風潮を表すととともに時代を風刺しているわけです。そうするとニュース価値が出てきて、マスコミの方達は、小さなイベントだけれども重要視してくれました。

また、マスコミの皆さんが書きやすいように情報を出すということも大切です。数字を統一して出していないと、情報の信頼性が問われます。情報の信頼性という意味からも、その基礎のデータだけはきちんと公開してきました。見出しコピーや修飾語などにも注意して、情報に物語性をつけていくようにしました。年度の最後に、映画祭、音楽祭などの報道されたスクラップ集というか記録集をつくりました。由布院の映画祭や音楽祭について、各新聞社や各テレビ局が、この一年間、どういう取材をしたかという記録集です。マスコミは自社のデータは持っていますが、他社のデータは持っていないようです。その報道記録集をばらっとめくると、すべてのマスコミの傾向が分かるのです。すると、来年の取材の参考になるわけです。「由布院の人達はマスコミを利用しているのではないか」とよく言われましたが、「いや、活用させていただいているのです」と、私達は言っています（笑）。

**伊藤** 最初は、映画祭などを開催するための資金というのはどうやって集められましたか。

**溝口** みなさん手弁当でやってくれました。赤字が出て借金をこさえると、実行委員の若者達は、給料やアルバイト代などで延々と毎月返済していました。

**伊藤** 例えばパンフレットみたいなものも皆さんで集めてつくられたのですか。

**溝口** 今は立派なものになりましたが、初めはみんな手作りでガリ版刷りのようなものでした。でも、みんなが参加して、絵心のある人は絵を描く、デザイン感覚のある人はレイアウトを担当する、文章の上手な人は解説文を書く、カメラを趣味としている人は写真を撮るといったように、自分が得手とすることを、一人ひとりが担ってくれました。強制的ではありませんでした。みなさんが一致団結して取り組んでいったということです。そして、それを継続させていくことです。継続させていくためには、強い想いととも楽しいということが大切です。由布院に来ると楽しいからというので、みんなが休みをとって来るのです。全国から、みなさん、毎年、故郷への里帰りのような感じで由布院に来てくれます。

**伊藤** 前回この対談で、赤福の浜田さんとお話した時に、味には先味と中味と後味がある、と言われました。要するにその循環が大事だということですが、まさに映画祭も、映画祭が終わった後、また来年楽しみだという形で、循環でつながっているのでしょうか。

**溝口** そうだと思います。どんな映画を観たいかという選別も一年かけてやるのです。次第にプロみたいにイベントの核になる人

が育っていきます。今では劇映画中心の「湯布院映画祭」とは趣の違った映画祭も催されています。今年で9年になりますが、「ゆふいん文化・記録映画祭」というドキュメンタリーを中心とした映画祭、それから「ゆふいんこども映画祭」というのも催されていますね。音楽祭でも、ホームコンサート的な「ゆふいんこども音楽祭」なども催されています。チェンバロンで世界的に有名な小林道夫さんは4年前に東京を引き払って由布院に移ってこられました。すると、小林道夫さんを頼って世界の音楽家達が由布院に来ます。そして、折角だからと、「アルテジオ」というホールで発表会をしてくれます。小林道夫さんも月に一回定例演奏会をしてくれます。すると由布院という地域の文化的なグレードというか地域のブランド力が上がっていくわけです。そのようにものごとを循環する仕組みをつくっていくと、地域の民度をより高くよりゆたかに育てることができるのです。

**伊藤** 最初におっしゃったように、「明日の由布院を考える会」という「明日」という言葉をつけたというのは、将来世代に対するつなげるという想いがあるのでしょうか。

**溝口** 「明日の由布院を考える会」としての形の組織はもう消滅しています。しかし、その想いの種は蒔かれています。そして、由布院にはそういう想いを持った人達が沢山住んでくれています。その方達と友好を深めようと、外の人が絶えず来てくれます。だから、由布院の町中では、毎晩、どこかで、由布院の内の人達と外の人達との交流が続けられています。

**伊藤** 日本の地域で問題だなと思うのは、どうしても閉鎖した中で考えがちですが、人間社会って交流というか、いろんな人の出入りがないとなかなか難しいですね。

**溝口** そうですね。由布院は、江戸時代、府内から太宰府へ抜ける街道筋にありました。由布院という村は農業中心の鄙びた寒村にすぎませんでした。街道筋ということで、人々の交流の歴史がありました。また、由布院盆地には 2000 人のキリシタンが生活していたと西洋の文献に書かれています。隠れキリシタンの墓も 400 基ぐらいこの町に残っています。それは今見ると単なる墓かもしれないけど、ヨーロッパにつながっていた由布院の人達の墓であるとともに、400 年前の由布院は単なる田舎ではなかった証しなのです。由布院は決して後進地域ではなく、昔から先取気鋭の遺伝子を持っていたわけです。

また、由布院の開かれた風土というのはいろいろな面でわかります。前にも話しましたが、本多静六博士が由布院に見えてされた講演にしても、大正という時代なのに、私達でも考えつかないような今に通じる素晴らしい提言ですが、当時の由布院の人達は強い関心を持って聞いていたのです。

**伊藤** 本多静六博士を由布院にお呼びしたというのは、地元の方の想いもあったのですか。

**溝口** 大正年間というと、私達の祖父の世代ですね。当時の村人達が何を考えていたのか分かりませんが、本多博士のような人を呼んでいたということに驚きを覚えます。私達がヨーロッパに行ったきっかけも、出

発に際していろいろな文献を調べていたら、本多博士の講演録が出てきたことが元になっています。全国いろいろなところを回っていますと、「自分達も由布院と同じ事を考えていた」と言われることが少なくありません。それではみなさんが考えて実際にやりだしたかというやっっていないのです。考えて踏み出したかどうか、それも、ひとりで踏み出したか、みんなで踏み出したかどうかで、随分、地域の活力の差が出てきています。

私達があれやこれやといろいろなことをやったものですから、「あの三人がいなければ町は静かがいい」と、行政の人達から随分言われました。次から次へと問題提起していくわけですから、行政の人達にとってはたまったものではなかったでしょうね。こういうものの考え方は、ひとつで収めようとしても収まらないわけです。町の中で絶えず議論をしていくことにより、人はお互いに心を開いてきますし、地域のコミュニティが築かれていくわけです。そういう面で由布院の文化度というか民度は相当高かったと思います。

由布院のまちづくりは、「町が美しくないと人が来ない」ということを基本にしていますから、由布院の景観問題が大切でした。この 40 年間、まちづくりを続けてきた中で、由布院らしいあるべき景観というのが何だったかということが次第にわかってきました。ヨーロッパなどへ出かけますと、農村まで含めての都市の美しさを、地域の大切な遺産として守っているわけです。町全体の景観を遺産として誇れるものとしてどう守る仕組みをつくっていくか、それに対して行政がどう助成をしていくかということが問題になります。外国では、街並み

形成に対して行政による十分な助成がなされています。行政は規制もする代わりに助成もしています。そのように美しい景観を絶えず求めた外国と我が国を比較してみると、我が国の景観に対する行政の取り組みはまだ十分とは思えません。

四季を通して変化する日本の風景はすごく美しいと思います。その中でも農村の生産というゆたかさを感じさせる景観を大切にしなければならぬと思います。そのためにも、まちづくりにおいて、景観というものを、都市の人達が生活の中でそれを活用できるような農村の景観をつくる必要がありますし、その時に農村というのが大事な要素になってきます。今は、都会の人達が農村に来て、都市の人達の要望を満たす状況ではないですね。都会の人達を受け入れる風土なり景観を地域でつくり得るかということが、農村である由布院のまちづくりの大きな課題です。

**伊藤** 先程の音楽祭とか映画祭は、都会の、まったく違ったところに住んでいる方を受け入れるひとつの窓口になり得ますね。

**溝口** 都会から来られた人達が、由布院は少しおしゃれして過ごす所だと言ってくれています。少しおしゃれして散歩したり食事したりと楽しんでくれています。由布院の農家の人達も、少しおしゃれをして音楽を聴くとか映画を観るとか、交流会に出るとか、そのようなハレの気分を楽しんでいます。そのためにも、由布院の景観をより美しくしなければいけないと思っています。

私も、近くの田圃が空いていれば、コスモスを植えたり、蕎麦を植えたりして景観のひとつとして活用するように努めています。

す。お米が何俵とれるかということのを換算して、それに上乗せした価格で農地を借りて、そこに景観としての花を植えるのです。そのようなことをできる人からやっていく運動を少しずつ進めていく以外に、地域の連帯感も、地域の景観も、そしてまちづくりそのものも良くなれないと思っています。

## 人材の育成

**伊藤** 最後に、これからの課題みたいなことをお話いただけますか。

**溝口** 課題といたしますか、民間にできることにはやはり限界があります。そのような時に、行政と一緒にやっていくというか、行政と民間との壁を取っ払って、情報などを共有していくことが大事だと思います。行政は情報を抱え込みがちでしたが、最近、行政も情報を積極的に開放してくれるようになりました。そこで、行政と民間とが協業していく仕組みをつくっていく中で、民間はあまり制約されないという面から、民間の方達から役所の中にどんどん入っていくようなことができるといいですね。

**伊藤** 大分県は比較的しっかりしている感じですね。

**溝口** そうですね、前大分県知事だった平松守彦さんは「一村一品運動」という地域づくりを提唱なされ実行しました。農業政策などで成果がなかったという批判もありますが、人材を育てたということでは意義深いものがあります。それとともに、商業、観光、農業の枠組みを越えたまちづくりということでは、その役割はすごく大きかつ

たと思います。ひとつの地域でひとつの何かいいものを育てていこうという思想は大事だったと思います。私達にやる気を起こさせたということと、積極的にまちづくりということに関心を持たせてくれました。まちづくりの創起の時代において先駆的な運動だったと思います。

また「一村一品運動」では、「豊の国づくり塾」という塾を、平松さんが塾長、私が委員長で開塾しました。今でも県内のあちこちにお邪魔すると、「塾の何期生です」という人が沢山います。そういう塾生達が、市長になったり、県会議員になったり、地域のリーダーになっています。そのような状況を見た時に、塾生達が塾で教育を受けて思想とか物の考え方を真摯に受けとめていたことがわかります。そういう「人づくり」の面では、「一村一品運動」というのは大変な役割を果たしたのだと、私は思っています。

人づくりは短時間でできるものではありません。地域に強力なリーダーをつくるとともに、その強力なリーダーを容認する風土をつくらないといけません。由布院の場合、現在、ある面で能力ある若者が頑張ろうとする時、みんなでその若者を応援し、若者を中心にして新しいプロジェクトをやらせよう取り組んでいます。イベントなどのまちづくりの機会に、「おまえは何ができるかやってみろ」と任せます。すると、今まで遊んでいて何をしていたかわからなかった若者が、音楽祭や映画祭の素晴らしいパンフレットをつくって、企画センスとかデザインとかに抜群の能力があるということがわかります。そして、その能力を皆さんが認める風土ができてくると、若者達が生き生きとしてくるのです。私達の先輩諸氏

は、私達が若い時にそういうことを認めてくれて自由にまちづくりをやる場をつくってくれました。「人づくり」では、やる気のある若者達を引っ張り出す仕組みなり舞台が必要となります。由布院では、それが映画祭とか音楽祭などのイベントであり、そこで若者達が光り輝くことができたのです。若者達が特技を何かで発揮できるような場があればいいのです。そのためには、地域が自由な風土をどこまで構築できるかということです。「あいつはつまらない」ではなく「あいつは素晴らしい」という一言を、先輩諸氏が添えるようなことにより、若者の才能は少しずつ芽生え育っていくのではないかと思っています。褒めて人を使うと言えば悪いけれど、やはりある程度褒めてやる、評価してやる大人達がその地域にどれだけいるかということが重要だと思います。また、外の有能な人をどんどん内に引っ張ってこられる磁力を持っている人がいるかどうか的大事ですね。外の人の言動に若者達は強い関心を抱きます。そして、外の人達の影響により若者達の輝きも一層に増してきます。

**伊藤** 今日はお忙しい中を。いろいろと貴重なお話をうかがわせていただいて、本当にありがとうございました。

平成18年8月26日実施  
(編集主幹：加藤裕己 NIRA 客員研究員)

溝口薫平（みぞぐち くんぺい）氏

1933 年生まれ。日田市立博物館勤務を経て、55 年より湯布院の自然保護、まちづくりに携わる。66 年、玉の湯旅館の経営に参加。サントリー地域文化賞、西日本新聞文化賞、大分合同新聞文化賞を志手康二氏、中谷健太郎氏とともに、また運輸省（現国土交通省）の交通文化賞を中谷健太郎氏とともに受賞。政府の「観光カリスマ百選」の第一弾 11 人の一人に選ばれる。

湯布院町商工会長、（財）人材育成ゆふいん財団理事長などを務める。現在、（株）玉の湯会長（由布院 玉の湯）。2005 年春の叙勲にて旭日小授章受章。